

Title	メンガー『国民経済学原理』の学史的 position 付けについて： ロツシャーとの関係を中心に
Sub Title	Mengers Grundsätze in der Geschichte der Wirtschaftswissenschaft : Menger und Roscher
Author	池田, 幸弘(IKEDA, Yukihiro)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.特別号- I (1990. 3) ,p.254- 269
JaLC DOI	10.14991/001.19900301-0254
Abstract	
Notes	福岡正夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900301-0254

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

メンガー『国民経済学原理』の 学史的⁽¹⁾位置付けについて

——ロッシェーとの関係を中心に——

池田幸弘

目 次

- 1 はじめに
- 2 『国民経済学の基礎』の構成
- 3 ロッシェーと古典派経済学
- 4 メンガーの『国民経済学原理』
- 5 ま と め

1 はじめに

古典派経済学，ドイツ歴史学派，そしてメンガーの三者関係は重層的かつ多面的である。従来の研究は，歴史学派を反古典派的と規定した上で，歴史学派とメンガーの方法論上の対立とメンガーの古典派経済学にたいする方法論上の擁護を強調してきた。そのこと自体は第一次接近としては正鵠を射たものであったが，これら三者のからみあいはいはれほど単純なものではない。さしあたりつぎの二点に留意する必要がある。

第一。メンガーは初版『国民経済学原理』（以下『原理』と略す）や『方法論』では，方法的には歴史学派批判の立場をとっていると思われるが，2版『原理』では歴史学派にたいする一定の譲歩を示している。したがって，メンガーと歴史学派の関係を敵対的なものとしてのみ理解するのは問題なしとし⁽²⁾ない。

注（1）執筆にあたり，塾の諸先生方から多くの教示を頂いた。また，メンガーについては川俣雅弘・中山智香子の両氏から教えられた論点が少なくない。ここに謝意を表したい。もちろん，残された誤謬については私のみが責を負うものである。

メンガーとロッシェーについては，それぞれ以下の文献を参照した。ただし，本文で述べたように，両者の関係については立ち入って論じたものはない。

メンガーについて……遊部 [2]，林 [8]，川俣 [9]，[10]，持丸 [16]，上宮 [23]，八木 [24]，Boos [4]，Hayek [7]，[8]，Kauder [13]，[14]，[15]。

ロッシェーについて……赤羽 [1]，橋本 [6]，榊原 [19]，白杉 [20]，Betz [1]，Eisermann [6]，Lifshitz [16]。

なお，ロッシェーにかんしての言及は少ないが，それ以前のドイツ語圏の経済的思考のパターンについて論じた Tribe [28] は重要な業績である。

（2）こうした点について明確に既存の研究史をのりこえたのは八木 [24]，第2章である。

第二。上記の見解は通説批判としては有効であるが、対古典派との関係をどうおさえるかがさらに問われなければならない。歴史学派がさまざまな観点から古典派経済学を批判したことは事実であるが、同時に理論的な意味においてかれらの一部は古典派経済学の継承者でもあった。そしてメンガーもまた、歴史学派を攻撃しつつも一部の論者については比較的好意的な態度をとり続けた。

本稿は、上記の第二の視点からなる古典派経済学、歴史学派、メンガーのテキスト間の考察である。そして、前二者にかんしては、とくに、J.S. ミル、ロッシャーに登場してもらおう。

J.S. ミルを起点として選んだのは以下の理由による。すでに宮崎 [15] や馬渡 [12] が示唆しているように、古典派経済学といっても、リカードウのように商品経済、つまり市場での交換に力点をおいた論者と、J.S. ミルのように一応は交換現象を捨象し超歴史的に経済を捉えようとした人物とは、趣をことにしている。(本稿では後者の思考方法をロビンソン・クルーソー経済モデルと言う。つまり、経済主体が一人からなる交換の要素を欠如したモデルのことである。)⁽³⁾ このことはかれらの主著の構成に端的に表れている。⁽⁴⁾ そして、ドイツ語圏の論者に強い影響を与えたのはリカードウではなくミルの経済学であった。⁽⁵⁾

歴史学派の人物としてロッシャーを選択したのは、ロッシャーが本来持っていた二面的な性格、つまり古典派経済学にたいして距離をおきつつも、それを受容しようとする彼の姿勢による。また、メンガー『原理』がロッシャーその人に捧げられている事実や、彼の『国民経済学の基礎』にたいする書き込みが、ミル『経済学原理』の独訳本やラウ『国民経済学原理』と並んで、大量かつ詳細であることも無視できないからである。さらに、メンガーが歴史学派の中でもロッシャーを別扱いしていたことも考慮しなければならないであろう。⁽⁶⁾ メンガーは、彼の『方法論』でロッシャーの『歴史的方法による国家経済学講義要綱』にふれており、それがすでに後の歴史学派の問題性をはらんでいたことを指摘したが、同時につぎのような断りを入れるのを忘れなかった。

「K. クニースや J. カウツは、W. ロッシャーとちがって『歴史的方法』を机上のことがらとしてのみではなく研究の実践においても問題とした。かれらは実際『歴史的方法による経済学』を書いた。しかしこうした著作は実際は経済学の叙述ではない」(Menger [18], S. 230. 邦訳, 210

注(3) 本稿でいうロビンソン・クルーソー経済モデルは、条件付き最大化(最小化)問題として表現される主体均衡とはかならずしも一致しない。たとえば、サミュエルソン [26] はリカードウの国際貿易論を線形計画法を適用することによって解釈している。そのこと自体は正当な対処であるが、そのさい価格比率が体系の中に与件として組みこまれている。したがって、リカードウの国際貿易論は交換を前提としており、本稿でいうロビンソン・クルーソー経済モデルには含まれない。これにたいし、ミルの生産論やメンガー表は交換からは独立である。

(4) もちろん、ミルにおいてもそうした視点がどの程度貫徹したかについては議論の余地がありえよう。たとえば早坂 [7] は「あの篇別構成が十分に考え抜かれた結果の首尾一貫した原理の上にとっているとは考えにくい」(早坂 [7], 129 ページ)としている。ミル『原理』の構成にかんして、あるいは古典派内部における構成の異同については、いずれ稿を改めて詳論したい。

(5) ミルとドイツ語圏の経済学、とくにロッシャーとの関連については、すでに先学の指摘するところである。ベッツ [1] はロッシャーにかんしてつぎのように述べて、ミルとの関係を示唆している。「多くの点で彼の著作はミルの『原理』とそれほど大きくことなっている訳ではない」(Betz [1], p. 415)。

ページ)。

ここで問われているのは、ロッシェアの方法と彼が実際にそうした方法を適用したかどうかであるが、現に「歴史的方法」を実践したクニースらにたいする批判からすれば、メンガーが逆にロッシェアを救おうとしたとも考えられる。そして、こうしたロッシェア評価はロッシェア逝去のさいにメンガーがものした一文でも変わらないのである。⁽⁸⁾

小稿では、とくに書物の構成に留意しつつ議論を進めていく。これは、書物の構成がテキスト間の問題と無縁ではありえないからである。書物の構成は、作者の意図を離れて自由にひきつがれていくものであるし、当事者が意識しないままに彼が立脚している基盤を明らかにしている場合が多々ある。これまでも、J.S. ミルの三分法については語られてきたが、ロッシェアやメンガーについては構成面からの十分な研究はなされていない。本稿の意図の一つは、この欠陥を補うことである。

このような作業が既存の研究史の上でいかなる意味を持つかについては以上述べてきたとおりであるが、最後に古典派経済学と限界主義経済理論との関係については何が言えるであろうか。

小稿は、古典派経済学の一部と限界主義経済理論の一部との間の連続性を主張する。いくつかの顕著の例外を除けば、この両者の間には断絶があるという見解が支配的であるから、拙論は通説に対する反論となりえよう。⁽⁹⁾

注(6) ここでメンガーがロッシェアの書物に施した書き込みについて簡単に解説しておきたい。メンガーの他の書物への書き込みがそうであるように、ロッシェア『国民経済学の基礎』への書き込みもその真意を把握することは容易ではない。たとえばメンガーはある箇所「猿は一日中食べている」(Roscher [24], S. 439 への書き込み)と書き込んでいるが、この含意はおそらく本人しかわからないであろう。書き込みがいかなる意味でも公刊を前提にしていない以上、このことは当然かもしれない。ただし、メンガーが公にした著作や論文の数がかならずしも多くないということを考えると、非公式のコメントである書き込みの重要性も否定できない。

まず、いつ書き込みがなされたかということが問われなければならない。書き込みがもし『原理』公刊後になされたということであれば、それは『原理』成立研究のための資料としては使えない。まずはっきりしている事実が、ロッシェア『国民経済学の基礎』第6版が1866年に公刊されている以上、それ以前に書き込みが加えられたということはありえないということである。したがって、書き込みが施されたのは1866年以降ということになる。また、書き込みにはラウやミル、そしてテュルゴの名前が見られるので、この時点ですでにそれらの書物についてはメンガーは読み終わっていたか、あるいはロッシェアの『国民経済学の基礎』と同時に読んでいたかのどちらかであろう。さらに書き込みには「ノート9をみよ」(Roscher [24], S. 32 への書き込み)とか「正しい説明はノート9にある」(Roscher [24], S. 40への書き込み)等のコメントがある。ここで言うノートとはメンガーがやはり60年代後半に用意していたとされる抜粋ノートのことを指しており、これらは今日デューク大学に保存されている。ノート9はその中の一冊である。以上の言明からして、ノート9はこの時点ですでに作成済みであったか、あるいは同時進行的に執筆されていたかのいずれかであろう。さて問題は書き込みの下限であるが、この点については残念ながら今日の時点で資料的根拠を添えていいうることはない。したがって、書き込みの一部が『原理』公刊後に施された可能性を100%否定しきすることはできないのである。この点は、上述の抜粋ノートの成立年代の確定の問題とあわせ今後に残された問題であろう。なお、デューク大学に保存されているメンガー関係の文書については馬渡 [13] を参照した。

(7) 以下、メンガーのロッシェア解釈については榊原 [19], 439-440ページ、白杉 [20], 65-67ページと Menger [19] に付せられた橋本昭一氏の解説を参照した。

(8) Menger [18].

なお、小稿ではメンガーの『原理』については初版のみを対象とする。『原理』2版にかんしては別の機会に論及することにする。

2 『国民経済学の基礎』の構成

多くの歴史学派の巨匠達について言われる、理論的ではないとの批判は、残念ながらここで問題にするロッシェアとその著書『国民経済学の基礎』についても、ある程度あてはまるようである。これは、ドイツ語圏の論者にとって、経済学がいわば輸入学問であり、既存の知識の消化に多忙であったことを意味する。したがって、逆に彼らの文献上の知識はきわめて豊富であり、このことはロッシェアに典型的にあらわれている。彼は博覧強記の人といわれており、読者に経済学上の知識を提供するさいに、かならず脚注を通じて研究史の詳細を述べるのを常としていた。そうした脚注を読むにつけ、彼が一級の学史研究者であることを強く感じるのである。

メンガーは『国民経済学の基礎』については、その初版、第3版、第6版、第7版、第9版、第10版、第12版、第18版、第22版を所有していた。⁽¹⁰⁾ここでは、そのうち彼が書き込みを施した第6版を使用する。これは、メンガー『原理』に先立つこと5年の1866年に公刊されている。

『国民経済学の基礎』は序論と5編からなっている。章ごとのタイトルを示せば、つぎのとおりである。

序論

第1章 根本概念

第2章 隣接諸科学の中での国民経済学の位置

第3章 国民経済学の方法

第1編 財の生産

第1章 生産要素

第2章 労働の編成

第3章 さまざまな労働の生産性

第4章 不自由と自由

第5章 財共同体 (Gütergemeinschaft) と私有財産

第6章 信用

注(9) 古典派経済学と限界主義経済理論との関係をめぐる筆者の考えはやや特殊であると考えられるので、ここで過去の研究史にふれながら、簡単に説明しておく。両者を断絶として捉える見方についてはさしておき、基本的なスタンスとして連続説を主張するものとしては、福岡 [5]、根岸 [18]、ホルンダー [9] [10] 等がある。前二者は連続性の根拠として J.S. ミルの需給論に着目し、さらに福岡はリカードの国際貿易論をあげている。こうした見方はワルラス体系を前提にした場合正しいものであり、また限界革命全体についてのバランスのとれた把握の仕方でもあろう。ただ、筆者はメンガー研究の立場から、ロビンソン・クルーソー経済モデルを切り口として選んでいる。そのため、J.S. ミルにしてもメンガーにしても、ロビンソン・クルーソー経済モデルを経た上で交換論に進むという論述の順序が問題になっている。したがって、わたくしはホルンダーのミル解釈には同意できない。彼は、ミル『原理』の前半部分を相対的に軽視しすぎているように思われる。

(10) Katalog [12].

第2編 財の流通

第1章 流通一般

第2章 価格

第3章 貨幣一般

第4章 物価の歴史

第3編 財の分配

第1章 収入一般

第2章 地代

第3章 労賃

第4章 資本利子

第5章 企業者賃金

第6章 三つの収入分岐についての総括

第7章 国民所得の分配

第4編 財の消費

第1章 消費一般

第2章 奢侈

第5編 人口

第1章 人口理論

第2章 人口の歴史

第3章 人口政策

上の構成にかんしては、三点指摘しておきたいことがある。まず、本論に入る前に序論が設けられ、そこで根本概念についての議論がなされていることである。根本概念とは、財・価値・財産というような基礎的な概念のことを指すが、ドイツ語圏の教科書、研究書では、こうした基礎的な概念について一定の紙面を割いて解説を与えることが慣行化していた。ロジャラーもまたこうした慣行を踏襲したのである。

第二に、本論に入ってからの構成に注目されたい。⁽¹¹⁾ここでの叙述の順序は、生産・流通・分配・消費・人口となっている。これは、セイの生産・分配・消費という構成や父ミルの生産・分配・交換・消費という構成、あるいは子ミルの生産・分配・交換という構成を想起せしめるが、もっとも重要なことは生産が流通（交換）に先行していることである。これはたんなる構成上の問題ではない。J.S. ミルは、交換学が経済学の対象であり、またそのみが経済学の対象であるとしたヘートリーやマカロックを批判し、こうした定義は狭すぎるとした。⁽¹²⁾彼は交換論の冒頭につきのように記し、先行する諸編との関係について述べている。

「ある著明な著述家は、経済学を呼ぶ名称として、交換の科学を意味する『Catallactics』という名称を提唱しており、また他の人たちはそれを『価値の科学』と呼んでいるのである。もしも私がこのような名称を理論的に正しいものであると思ったならば、私は、価値にかんする基本的諸法則の議論を『第3編』に来るまで残しておかないで、この研究の冒頭に置いたに相違ない。

注 (11) 以下の論述にさいしては、馬渡 [12], 6-8ページ, 塘 [22], 171-172ページから示唆を得ている。

(12) 深貝 [3], pp. 3-6, 馬渡 [12], 55ページ。

しかしこれにかんする議論をここまで延ばしておくことができるということは、それだけでも、経済学の性質にかんするこのような見方があまりに狭い見方であることを示す、十分な証拠になるものである」(Mill [21], vol. 3, p. 455. 邦訳, 3巻, 17ページ)。

上の引用文は、経済の本質についてのミルの考えをよく示しているが、ロッシェーもまたつぎのように述べ、唯一人の経済主体からなるモデルも多数の主体からなるモデル同様意義を有するとの見解を明確にしていた。

「そのさい、バスティアは非常に狭く交易だけのことを考えている。しかし、ロビンソンもまた経済を持っていたのではなかったか。農民が彼自身の所帯で消費する生産物や彼自身が行う労働の場合、販売用の生産物や彼の農奴の労働の場合よりも、経済の契機がより少ないのだろうか」(Roscher [24], S. 4)。

直接批判の対象となっている人物はここではバスティアであるが、批判の要点は J.S. ミルの場合とほぼ同様である。メンガー自身は、『原理』の前半部分では交換を前提にしない議論を展開しているので、大局的には J.S. ミルやロッシェーの側に立っていたといつてよい。オーストリー学派のロビンソン・クルーソー的発想方法の原点はすでにロッシェーにおいてあったのである。

さらに細かい点であるが、父ミルの生産・分配・交換・消費という構成を前提にした場合、流通論(交換論)の順序が入れ替わっていることを指摘しておきたい。こうした構成上の逆転が、いついかなる理由によって行われたかは明らかではない。だが、逆転がロッシェーのみに固有なものではないことは確かである。事実、1864年に公にされたレスラーの『国民経済学原理』では、生産・流通・分配・消費の順序で叙述がなされているのである。分配論の後置は、とくに子ミルの分配論についての考え、つまり分配の問題は交換の問題から独立に説きうる⁽¹³⁾との考えを知っているわれわれにとっては、重大な理論的含意を持つが、メンガーの立場からしても軽視できない側面を持つ。メンガー研究の見地からみた構成の逆転現象の意味付けについては後にみるが、結論だけを先に述べておくとすれば、メンガーの考えは J.S. ミルに近くロッシェーとはその限りではことなっている⁽¹⁴⁾ということなのである。

3 ロッシェーと古典派経済学

多くのドイツ語圏の教科書がそうであるように、ロッシェーの『国民経済学の基礎』も財論で始

注 (13) 馬渡 [12], 14ページ以下。

(14) ロッシェーの書物の構成とベームの初期講義録の構成について、塘 [22], Tomo [27] に依拠しつつ若干説明しておく。ベームの講義録は、序論、国民経済学の基礎、生産の理論、経済的交易、財の分配、財の利用、国民経済の攪乱の順序で構成されている。こうした構成だけからも了解されるように、ベームの講義は既ねロッシェーの『国民経済学の基礎』をベースにしてなされたといつてよいだろう。特筆すべきは、分配論が交換論の後に置かれていることであり、その点ではベームの扱いは J.S. ミルやメンガーとはちがっている。分配論ではロッシェー同様需給論が適用されている。

(15)
まる。彼は財をつぎのように定義する。

「真実の人間の欲望満足にさいし有用であると認められたすべてのものを、われわれは財と名づける」(Roscher [24], S. 1)。

もしも人間と自然との関係、そして前者の欲望充足過程を強調する立場を主観価値学説と呼ぶのであれば、上の定義がすでに主観価値学説の契機を含んでいることは容認されてよい。

財論は人間と自然とのかかわりを問題にするものであるから、人間の见解や判断がことなれば、人間と物との関係は当然変化する。今の文脈で考えればそのことは以下のようになる。

「したがって、財概念は本質的に相対的なものである。われわれの欲望が変化するときはいつでも、時には財領域の限界が変わり、時には財領域の水準差が変化する。タバコは何千年以来存在している。しかし、人がそれを嗅ぐことや喫うことの有用性を認識し、ほしがることを覚えて、はじめてタバコは財となった。……他方、まじない、惚れ薬、そして聖遺骨さえも、その有効性にたいする信頼が失われるのと共に、その財性質が失われた」(Roscher [24], S. 1)。

ここで問題になっているのは、財性質と人間の欲望の関係である。物の性質が不変であったとしても、人間の物に対する欲望が変化すると共に、それは財になったり逆に財でなくなったりする。引用文では、前半部分で財性質の獲得が、後半部分で財性質の喪失が説かれている。

前の節でみたように、ロッシェアの『国民経済学の基礎』はその構成をセイヤミル親子に負っていた。第1編生産論での論述も子ミルの影響が顕著であるが、ここではロッシェアが生産の迂回化＝高次財化と経済発展の関係をどのように捉えていたかをみておくことにする。⁽¹⁶⁾資本が最後の段階で登場する点に注意されたい。

「最初の時期においては、どこでも自然の要素が支配的である。森林、河川、牧場は人手なしに希薄な人口を養うことができる。伝説が語る太古の時代である。ここでは本来の意味での富は存在しえない。しかし、まったく土地を持たない人は完全に従属的な従者に、つまり土地所有者の奴隷になる危険がある。第二期においては、近代民族が中世末期からそうであったように、労働の要素がより重要になる。労働と共に都市制度も発達するが、同業者開業拒否権やギルド法も発展する。その結果、労働がいわば資本化される。土地所有者と農奴との間に中間層が形成される。第三期では、資本が牛耳るようになる。土地は資本投下によって無限にその価値を増やす。工業でも、機械が人間を圧倒するようになる」(Roscher [24], S. 86)。

みられるように、ロッシェアの議論はたんなる技術的な意味での経済発展論ではなく、彼独自の歴史認識を示している。この点、歴史学派の巨匠としてのロッシェアの姿が遺憾なく表現されている。ことに「第三期」についていわれる「機械が人間を圧倒するようになる」という表現は、高次

注(15) メンガー自身『原理』においてロッシェアの財論にふれている。Menger [17], S. 2. 邦訳、6ページ。

(16) 以下、ロッシェアの経済発展論にかんしては赤羽 [1], 199ページ以下、白杉 [20], 85-86ページによる。

財化に伴う弊害を含意している。ロッシェーは経済が高次財化することによる利点をも認めていたから、彼の資本認識は両義的である。こうした発展段階論とメンガーの関係については、後の行論で扱うことになる。

ロッシェーは第2編流通論では市場での交換を前提にした議論を行っている。まず、第2編で展開されている需給論としての価格についてみよう。⁽¹⁷⁾ロッシェーの需給論はつぎのようなものである。

「したがって通常、二つの商品の価格は、第一には需要と供給（所有したいという願望、獲得の困難）の関係によって規定される。だからわれわれは、供給と需要自体がよりいっそう根本的な状況にいかにか依存しているかをみとめることにする。そこで、買手にとっては商品の使用価値と彼自身の支払い能力が価格の上限となる。しかし、これは他の方法による調達費用によって下がることもある。売手にとっては生産費が下限となる。しかし、これは買手にとっての他の方法による調達費用によって上がることもある」(Roscher [24], SS. 191-192)。

みられるようにロッシェーの需給論はなかなか複雑である。まず価格が需要と供給の関係によって決まるといふ点では問題がないが、彼はそれぞれが「商品の使用価値と」「支払い能力」、そして「生産費」に依存するとしている。彼自身の議論はかならずしも明白でないが、「支払い能力」と「他の方法による調達方法」は買手の行動に影響を与えるパラメーターである。そして後者は、売手の供給関数の中にもパラメーターとして登場する。つまり、ここでは複数の買手の存在が考えられており、その出方によっては売手・買手が威嚇行動を行う余地が生ずる。ロッシェーはこうしたパラメーターの変化によって均衡価格水準が変わることを述べているのである。

こうしたロッシェーの議論は J.S. ミルの需給論を下敷きにして⁽¹⁸⁾いる。ミルは、供給、需要といった言葉について読者に注意を与えつつ、つぎのような形で需給論を定式化している。以下は稀少財についての言及である。

「ある商品がある市場において持つところの価値は、その市場において、現存の供給、あるいは予想される供給を消化するのにまさしく足りるだけの需要を生じさせるような価値以外の価値ではないであろう」(Mill [21], vol. 3, p. 468. 邦訳, 3巻, 41ページ)。

ここで言われている「現在の供給」という言葉を文字どおりにとれば、供給は与件として扱われているようにも解しうるが、他方でミルは供給量そのものも価値に依存することを認めていた。後者の場合、ごく通常の需給論となる。需要と供給が一致する点で価値が決まるといふわれわれに親しい議論である。ミルは需要関数や供給関数のシフトによる比較静学命題についても述べているので、その点でもロッシェーの価格論の先駆とみなしうるものである。

つぎに生産要素にかんする価格論についてみる。これは『国民経済学の基礎』第3編で展開され

注 (17) ロッシェーの価格論についてはすでに橋本昭一氏が言及されておられる。あわせて参照されたい。橋本 [6], 163ページ。

(18) 以下ミルの需給論についての解釈は、深貝 [4], 46ページ以下、南方 [14], 151ページ以下、森 [17], 344-353ページによる。

ている。ロッシェアの考える生産要素は、土地・労働・資本・企業者職能の四つであるが、それぞれについての価格決定のメカニズムの説明はほとんど大同小異であるから、ここでは土地のみについて考察することにする。ロッシェアは言う。

「この価格〔地代〕もまた当然、供給と需要の關係に依存している。需要はここでも買手の欲望と支払い能力に依存する。しかし、供給はまったく生産費に依存しない。というのは、土地の生産費というのは上に述べた概念の説明からして考えられないからである。ところで、土地はその価格が本質的にその生産物によって規定されているという点で、他の生産手段と同じである」(Roscher [24], S. 302)。

引用文の前半では先に述べた需給論が生産要素について適用されている。ここでは地代が問題になっているので供給要因として生産費を考えることは不可能だと言われる。その場合何が供給要因を規定するのかという点については、たちいった説明はない。というか、土地の供給を直ちに増やすということは不可能なので外生的に所与とされているのかもしれない。後半部分では、一見後のメンガーの帰属理論的思考方法に通じるかのような言明がみられる。「土地はその価格が本質的にその生産物によって規定されている」とした部分がそうである。しかし、そのことをメンガーに引きつけて過大評価してはならないだろう。ここでは、むしろ交換論による価値決定の議論と帰属理論的思考の混在を指摘しておく。

ところで、こうしたロッシェアの立場は J.S. ミルのそれとはちがっている。⁽²⁰⁾ミル自身は、分配は交換に先行するという見解を概ね維持し、とくに利潤についてつぎのように述べていたのであった。

「もし分業が行われていなかったならば、売買は行われまいであろう。しかしそれでも利潤は存在するであろう」(Mill [21], vol. 2, p.411. 邦訳, 2巻, 410ページ)。

先のロッシェアの主張が市場での売買、つまり交換を前提にしていたのにたいし、ミルは交換がないとしてもやはり利潤は存在するとしている。換言すれば、ミルは超歴史的な存在として利潤を問題にしているのであり、その意味で利潤現象は資本制社会に限定されるものではない。そして、この点についてはメンガーに近いのはミルでありロッシェアではない。

4 メンガーの『国民経済学原理』

まずはじめに、メンガー『原理』の内容に立ち入る前に、その構成を調べておくことにする。

注 (19) したがって筆者はつぎのようなベームの見解には賛成できない。「生産手段の価値がその生産物によって決定されるという観念は、従来経済学の文献上特殊な運命を与えられてきた。この観念はそれ自体においてはかく明白なものであるために、つとに自明の理であるかのようにみなされてきた。ことにこのような観念は早くもセイにおいて、下つてはヘルマン、リーデル、ロッシェアにおいて認められる。」(Böhm-Bawerk [2], SS. 65-66. 邦訳, 111ページ)

(20) 以下のミル解釈は、基本的には馬渡 [12], 14ページ以下、杉原 [21], 第2部第1章に依拠している。

- 第1章 財の一般理論
- 第2章 経済と経済財
- 第3章 価値の理論
- 第4章 交換の理論
- 第5章 価格の理論
- 第6章 使用価値と交換価値
- 第7章 商品の理論
- 第8章 貨幣の理論

メンガー『原理』の構成は、一見したところさきにしたロッシェの書物の構成とは無関係に思われるかもしれない。だが、そうではない。やがてみるように、メンガー『原理』第1章から第3章までは、根本概念の整理という側面を併せもつとはいえ、理論的に言えばおしなべて生産論である。この点にかんしての筆者の理解は、メンガー体系＝消費論とする従来の通説とはことなっていると思われるので、後にやや詳しくみることにする。第3章までは、経済主体は一人しか登場しないロビンソン・クルソーの世界である。メンガーは第4章でこうした世界を離れ、市場での交換を前提とした交換論にはいる。流通論（交換論）での両者の継承関係を整理すれば以下のようになる。第5章 価格の理論はロッシェの第2編第2章 価格に該当する章をみいだす。また、第7章 商品の理論はロッシェの第2編第1章 流通一般にあたる。また、『原理』最終章 貨幣の理論はロッシェの第2編第3章 貨幣一般に相当しよう。このように、流通論内部での若干の順序の異同はあるものの、両者の関係は明白である。

問題は、分配論や消費論、それに人口論に該当する章がメンガーにはないことであろう。ここでは、とくに筆者の観点から重要だと考えられる分配論の位置付けについて論じておく。

筆者は、分配論ではロッシェとメンガーはことなつた地平に立つものとする。メンガーの生産要素価値の決定の議論が、市場での交換を前提にしないで説かれていることは、あまねく知られている事実である。⁽²¹⁾つまり、生産物価値がメンガーにとってそうであったように、生産要素価値もまた相対的な交換比率としての意味を持たない。ところが、ロッシェは地代について「この価格もまた当然、供給と需要の関係に依存している」として、生産要素の価値（価格）は市場での需要と供給の関係から決まるものと考えていた。だから、彼は流通論の後に分配論をもってくる必要があつたのである。ここに両者の相違がある。メンガーの議論は、この点ではロッシェを越えていると言ふべきであつて、「利潤の原因を流過程にもとめる俗見をしりぞけ」（杉原〔21〕、108ページ）た J.S. ミルらに直接連なるものであろう。メンガーの分配論は実際生産論の中に包摂されている。

このようにいくつかの相違点はあるものの、メンガー『原理』の構造は、ロッシェを結節点として遠く J.S. ミルらの古典派にその知的源を尋ねることができるのである。

つぎに、メンガー『原理』の内容をみていく。メンガーの『原理』もまた、ロッシェの書物と同じく財論からはじまる。メンガーがあげているものが財たりうるための4条件とは以下のような

注(21) メンガーの価値概念については川俣〔9〕によるところが大きい。

ものであった。

「1. 人間の欲望。

2. 物がこの欲望の満足と因果連関に置かれることを可能にする物の属性。
3. この因果連関の人間の側の認識。
4. この物が上の欲望満足のために事実上利用されるように、この物を支配 (Verfügung) すること」(Menger [17], S. 3. 邦訳, 2 ページ)。

メンガーはロッシェの議論を踏まえつつ、この後に財性質の喪失について論述を行っている。メンガーはものが財になるための条件を逐一列挙しており、それにたいしロッシェは一つの文章で条件を表現してしまっている。こうした論述方法の相違はともかく、全体としてはメンガーはロッシェの議論を継承するものだといつてよいであろう。なお、細かい点であるが、ロッシェが財性質の喪失を説明するさいに例として使った「惚れ薬」(Liebestranke) をメンガーが「擬制財」の例示として転用していることにも注意しておく⁽²²⁾。

メンガーの『原理』前半部分の内容は生産論に該当する⁽²³⁾。そして、これがメンガーの『原理』でのもっとも顕著な貢献である。メンガーの生産論は、それ自体厳格な形で定式化されることはなかったが、それにもかかわらず後世の理論家達に多大の影響を与えた。ベームの資本理論はメンガーの生産論から大きな示唆を受けているし、ハイエクの『価格と生産』もそうであった。あるいはことなる学派に属するヴィクセルをその中に加えてもよい。いわゆる単線進行的な生産モデルの原型はメンガーに求められるといつてよいだろう。また、対ワルラスとの関係で言えばワルラスが経済の横の流れを強調したのにたいし、メンガーは経済の縦の流れを重視したことになる。メンガーにおいては、不確実性の問題も時間要素の問題も結局は生産の問題に帰するのである。彼の生産論は高次財の理論として、つぎのような形で展開されている。

「われわれが第1次財を支配するならば、われわれはそれを直接に自己の欲望満足のために使用することができる。われわれがこの第1次財に対応する第2次財を支配するならば、われわれはそれを第1次財に変形し、このようにして間接的に自己の欲望満足に振り向けることができる。さらにまた第3次財を支配しさえすれば、われわれはそれをまず対応する第2次財に、つぎにこの第2次財に対応する第1次財に変形し、このようにしていっそう間接的な方法においては第3次財をわれわれの欲望満足のために招致しうることができる」(Menger [17], S. 11. 邦訳, 11ページ)。

みられるように、メンガーの人間もまた「自己の欲望満足のために」自然の贈り物を「変形」していかなければならない。ロッシェの世界に登場する人間もメンガーの世界に登場する人間も、同じく資源の絶対的な制約のもとで生きていかなければならない。自然の恵みが十分であれば、人間は寝て暮らすことができるが、二人が想定している人間像はこうした種類のものではない。むしろ

注 (22) Menger [17], 邦訳, 3 ページ。

(23) 以下、メンガー体系における生産理論の重要性にかんしては川俣 [10] の教示に多くを学んだ。

る逆に、きわめて能動的な生産の主体としてのロビンソン・クルーソーが描かれているのだ。メンガー表の存在を根拠に、それが所与の資源の下での最適配分問題であることから、メンガーにおける生産論の不在を指摘することも可能であるが、こうした見方は一面的である。上の引用文が示しているように、いかに素朴な形であれ、メンガー体系に生産の契機が組みこまれていることは認めておかなければならない。

前節で述べたようにロッシャーの経済発展論は彼独自の歴史認識に裏付けられていたものであるが、メンガーはこうした議論を次のような形に焼きなおす。これも生産の問題にはかならない。

「一国民が、たんに採取的活動すなわち実在する低次財〔人間のもっとも野蛮な状態では多くの第1次財、時には第2次財〕の採取にとどまるかわりに、第3次財、第4次財、さらにそれ以上の高次の財にまで手を伸ばし、このようにして自己の欲望満足に財を招致するためにますます高次の財にまで進むならば、とくに合目的な分業が存在する場合、アダム・スミスがもっぱらこの分業のみに帰しようとしたあの福祉の増進をここに認知することができるだろう。

われわれには、棍棒をもって野獣を追った猟人が弓矢、網をもっている狩猟に、つぎに、牧畜に、さらに進んで後者のますます集約的な形態に移行し、野生の果実で生活した人々が農耕のますます集約的な形態に移行し、工業が起こり、それが道具、機械を通じて完全となるのが認められ、以上のことときわめて密接に関係してこの民族の福祉が増大するのが見られるであろう」(Menger [17], SS. 27-28. 邦訳, 25-26ページ)。

ロッシャーの場合と同様、ここでも歴史の進行に伴って経済が高次財化することが主題となっている。ただ、機械の導入に伴う弊害をも指摘したロッシャーとは違い、経済の迂回化はもっぱら肯定的に評価されている。つまり、迂回生産によって一般に「福祉は増大」するのである。こうしたことから、メンガーとロッシャーの歴史認識の相違を強調することも可能であるが、歴史学派の強調する経済発展論がメンガーにおいてもまた存在することを筆者は重くみる。

メンガーは彼の生産論に基づき、帰属の理論を展開する。

「低次財がわれわれにたいして持つ価値はその生産に用いられた高次財の価値によって制約されるのでなく、むしろ明白なのは、反対に高次財の価値がつねにそれが生産するところの低次財の予想価値 (voraussichtlicher Werth) によって制約されているということである」(Menger [17], SS. 123-124. 邦訳, 121-122ページ)。

古典派経済学の加算理論が生産要素の価値から生産物の価値を導出しているのにたいし、メンガーは生産物の価値から生産要素の価値を導いている。こうしたことは、すでに多くの研究者が指摘してきたとおりであり、筆者もそれは認めている。だが、生産費説あるいは労働価値説を採用した多くの論者もまた、人間労働が究極的には人間の欲望充足の為になされていることを明示的に述べている。J.S. ミルやマルクスが良い例である。ただ、労働価値論史の上でその後の議論のひながたとなったリカードウに労働過程論が欠けていたために、帰属理論的発想と労働価値論ないし生産費説とがあたかも相入れないかのような印象を残してしまったのである。人間の立場から自然を変形

するという原理からみれば、それらの見解の違いは硬貨の両面にも譬えられよう。

ここでむしろ重要なことは、生産要素の価値決定が生産物の価値決定と同様に主体均衡の次元でなされているということである。おそらく、メンガーの価値概念を現代の理論家ならば影の価格と呼ぶであろう。だから、需給論を踏まえたロッシャーの生産要素についての価格決定の議論とメンガーの帰属理論とはその内容をことにしている。繰り返していうのならば、メンガーの考えは、生産の内部の問題として利潤を説こうとした J.S. ミルの努力を想起せしめる。

メンガーは『原理』第4章から、複数の経済主体を導入するに至るが、ロッシャーとの関係でとくにふれておきたいのは第5章 価格の理論である。そこで展開されているモデルは三つあると考えられるが、最初に扱われるのが「孤立的交換」のモデルである。登場する経済主体は二人で、Aは穀物をBはぶどう酒を所有している。かれらは、初期状態を改善しうる限り交換に参加するが、そうでない場合は交換を行わない。よりいっそう具体的には、Aは「40単位のぶどう酒にたいし100単位よりも少ない穀物を与えればよい場合にのみ穀物を与えてぶどう酒を手に入れようとする」(Menger [17], S. 176. 邦訳, 175ページ)。逆に、Bは「80単位の穀物に40単位のぶどう酒と同等の価値を認め」(Menger [17], S. 176. 邦訳, 176ページ)ているとしよう。この場合、ぶどう酒の交換比率は「穀物の80単位と100単位との限界の間に、しかもつねに穀物の80単位より大きく100単位より小さくなければならないことだけは確実である」(Menger [17], S. 177. 邦訳, 176ページ)とメンガーは言う。メンガーの主張は簡単な需給均衡モデルによって、よりいっそう明確に理解することができる。具体的には、上の論述をもとにAとBの需要関数と供給関数を定式化し、その交点として価格を求めることで、メンガーの結論が得られる。さきにみたロッシャーの価格論も基本的には同一の論理構造を持っている。ただ、ロッシャーの場合、需要関数と供給関数の中にパラメーターが入っていると考えられ、その変化による比較静学命題を導出していた。メンガーには、こうした点についての言及はない。また、ロッシャーは「売手にとっては生産費が下限となる」としているが、この点もメンガーとはちがっている。メンガーの場合、売手はたんなる交換の主体であり、生産の主体としての意味はない。

ロッシャーが「他の方法による調達方法」という時、そこに含意されているのは同種の経済主体の間の競争である。この視点は、メンガーが「独占財をめぐる多数人の競争があるときの価格形成」(Menger [17], S. 181. 邦訳, 181ページ)を問題にする時には、生かされているように思われる。そこでのモデルは、「多数人の競争あるときの価格形成」と言われていることからわかるように、競争の要素を解釈上容認するような数値例となっているからである。

5 ま と め

以上みてきたように、メンガーの経済理論はロッシャーの『国民経済学の基礎』をへて J.S. ミルの経済学に連なっている。本稿では、第2節、第3節では J.S. ミルとロッシャーのテキスト間

の関係を保い、第4節ではそれをふまえてミル、ロッシェー、メンガーの三者関係を明らかにした。

これまでの研究では、古典派経済学と歴史学派との対立が経済学の方法いかにという見地から一面的に強調されてきたが、ここでの結論は理論面からみた J.S. ミルとロッシェーの継承関係、そしてロッシェーとメンガーの継承関係が重要だということであった。つまり、イギリス古典派経済学の受容者としてのロッシェーの性格も見失われてはならないし、そのロッシェーが理論的にみてメンガーに影響を与えたことも否定できない事実である。本稿では、ロビンソン・クルーソー経済モデルに分析視角を求めつつ、ことにテキストの構成に注意を払いながら考察を進めてきた。ロビンソン・クルーソー経済モデルとして表現される生産が交換に先立つものであるという認識は三者が共有するものであり、その出発点は J.S. ミルであった。

もちろん、三者間の関係は理論面に限ってもさほど単純なものではない。既述のように、こと生産要素の価値についてはロッシェーの議論とミルの主張との間にはやや隔りがある。そして、メンガー自身の立場は、交換現象を扱う前に分配の問題を処理しているという意味において後者に近いものがあつた。第2節で述べたように、交換論の後に分配論をおくという手法は一人ロッシェーに独特なものではないから、英独、あるいは仏独の経済学の交流史をふまえた上で、どのような理由で誰によっていつこうした改変がなされたかについては、より詳細な検討が必要であろう。この点についての詳しい考察は別の機会に譲るほかない。

ともあれ、本稿の分析が正しければ、古典派経済学、歴史学派、メンガーの位置付けは、従来の研究史が教えるところとはことなつてこようし、また、古典派経済学と限界主義経済理論との関係も今までとは別個の視角からその連続性が確認されえたとと思われる。

文献表（邦語文献）

- [1] 赤羽豊治郎『ドイツ歴史派経済学研究』風間書房、1970年。
- [2] 遊部久蔵「メンガー財論の基本的問題」、『三田学会雑誌』64巻1号、1971年11月。
- [3] 深貝保則「J.S. ミル『経済学原理』における価値論の舞台設定」、『山形大学紀要 社会科学』15巻1号、1984年7月。
- [4] 深貝保則「J.S. ミルの価値理論における効用・労働・生産費」、『山形大学紀要 社会科学』17巻1号、1986年7月。
- [5] 福岡正夫「価格決定における需要の役割」、『三田学会雑誌』64巻1号、1971年11月、同『均衡理論の研究』創文社、1985年に再録。
- [6] 橋本昭一「歴史学派における方法論議」、杉原四郎・菱山泉編『セミナー経済学教室2』日本評論社、1974年7月所収。
- [7] 早坂 忠「J.S. ミル『経済学原理』第4篇をめぐって」、『社会科学紀要』（東京大学）、1964年。
- [8] 林 治一『オーストリア学派研究序説』有斐閣、1966年。
- [9] 川俣雅弘「Ferdinando Galiani の稀少性価値理論の歴史的位置について」、『三田学会雑誌』81巻第2号、1988年7月。
- [10] 川俣雅弘「限界効用理論の歴史における Carl Menger の価値理論の意義の役割について」、未公刊。

- [11] 熊谷次郎「ミル『経済学原理』の構成について」、『桃山学院大学経済経営論集』19巻2号，1977年9月。
- [12] 馬渡尚憲「J.S.ミル『原理』の構成」、『研究年報 経済学』（東北大学）50巻2号，1988年9月。
- [13] 馬渡尚憲「カール・メンガー文書」，経済評論，1988年5月，日本評論社。
- [14] 南方寛一「J.S.ミルの『原理』における需給法則」、『経済学研究』（神戸大学）8号，1961年。
- [15] 宮崎喜代司「ミル『経済学原理』の基本構造とその学史的的位置」、『経済学研究』（九州大学）25巻3号，1960年1月。
- [16] 持丸悦朗「メンガーの『Bedürfnis の理論』について」、『三田学会雑誌』51巻5号，1958年5月。
- [17] 森 茂也『イギリス価格論史』同文館，1982年。
- [18] 根岸 隆「学派とパラダイム」，日本経済新聞，1989年2月22，23，24，25，27，28日。
- [19] 榊原 巖『社会科学としてのドイツ経済学研究』平凡社，1958年。
- [20] 白杉庄一郎『国民経済学研究』弘文堂書房，1933年。
- [21] 杉原四郎『イギリス経済思想史』未来社，1973年。
- [22] 塘 茂樹「講義『国民経済学』——初期ポエーム＝バヴェルクの講義録について——」、『三田学会雑誌』78巻5号，1985年12月。
- [23] 上宮正一郎「メンガーの Bedürfnis 論」、『国民経済雑誌』128巻2号，1973年8月。
- [24] 八木紀一郎『オーストリア経済思想史研究』名古屋大学出版会，1988年。

文献表（欧文文献）

（とくに一橋大学社会科学古典資料センターの文献を使用した場合には，同センターの請求番号を並記してある。また，本稿では邦訳のある文献については原則的には既存の邦訳によったが，かならずしも忠実にはしなかった。）

- [1] Betz, H. K., "How does the German Historical School fit?", *History of Political Economy*, Fall 1988.
- [2] Böhm-Bawerk, Eugen von, "Grundzüge der Theorie des wirtschaftlichen Güterwerts," *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*. Neue Folge, Bd. 13, reprinted as No. 11. of Series of Reprints of Scarce Tracts in Economic and Political Science, The London School of Economics and Political Science, 1932. 長守善訳『経済的財価値の基礎理論』岩波文庫，1932年。
- [3] *Ditto, Earlier Lectures on Economics*, edited by Shigeki Tomo, Study Series No. 13, Center for Historical Social Science Literature, Hitotsubashi University, 1987.
- [4] Boos, M., *Die Wissenschaftstheorie Carl Mengers*, Wien Köln-Graz, 1986.
- [5] Bucharin, N., *Die politische Oekonomie des Rentners*, Wien-Berlin, 1925. 小林良正訳『金利生活者の経済学』白揚社，1936年。
- [6] Eisermann, G., *Die Grundlagen des Historismus in der deutschen Nationalökonomie*, Stuttgart, 1956.
- [7] Hayek, F. A., Einleitung, in: Carl Menger, *Gesammelte Werke*, Bd. 1, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, J. C. B. Mohr, Tübingen. 邦訳「カール・メンガー評伝」、『経済志林』，第9巻第1号，1935年。
- [8] *Ditto*, "The Place of Menger's Grundsätze in the History of Economic Thought," in J. R. Hicks and W. Weber ed., *Carl Menger and the Austrian School of Economics*, 1973.
- [9] Hollander, S., *The Economics of John Stuart Mill*, vol. 1, 2, Oxford, 1985.
- [10] *Ditto, Classical Economics*, Oxford and New York, 1987.

- [11] Howey, R. S., *The Rise of the Marginal Utility School 1870-1889*, Univ. of Kansas Press, 1960.
- [12] *Katalog der Carl Menger-Bibliothek in der Handels-Universität Tokio*, Bibliothek der Handels-Universität, Tokio, 1926, I.
- [13] Kauder, E., *Menger and his Library*, 『経済研究』第10巻第1号, 1959年。
- [14] Ditto, "Aus Mengers nachgelassenen Papieren," *Weltwirtschaftliches Archiv*, 1962.
- [15] Ditto, *A History of Marginal Utility Theory*, Princeton New Jersey, 1965. 斧田好雄訳『限界効用理論の歴史』嵯峨野書院, 1979年。
- [16] Lifschitz, *Die historische Schule der Wirtschaftswissenschaft*, Bern, 1914.
- [17] Menger, C., *Gesammelte Werke* hrsg. von F. A. Hayek, Bd. 1-4, J. C. B. Mohr, Tübingen, 1968-1970, Bd. 1, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*. 安井琢磨訳『国民経済学原理』日本評論社, 1940年。
- [18] *Derselbe, Gesammelte Werke*, Bd. 2, *Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften und der politischen Oekonomie insbesondere*. 福井孝治・吉田昇三訳(吉田昇三改訳)『経済学の方法』日本経済評論社, 1986年。
- [19] *Derselbe*, "Wilhelm Roscher," *Neue Freie Presse* vom 16 Juni 1984, in *Gesammelte Werke*, Bd. 3. 橋本昭一訳「メンガーのロッシュャー評」, 『経済論集』(関西大学) 25巻5号, 1975年12月。
- [20] *Derselbe, Carl Mengers Erster Entwurf zu seinem Hauptwerk "Grundsätze" geschrieben als Anmerkungen zu den "Grundsätzen der Volkswirtschaftslehre" von K. H. Rau*. 1963.
- [21] Mill, J. S., *The Collected Works of J. S. Mill*, Vol. 2, 3, *Principles of Political Economy*, Toronto. 末永茂喜訳『経済学原理1-5』岩波文庫, 1959年。
- [22] Rau, K. H., *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, Leipzig, 7. Auflage, 1863.
- [23] Rösler, H., *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, Rohstock, 1864. (Comp. 283.)
- [24] Roscher, W., *Die Grundlagen der Nationalökonomie*, Stuttgart, 6. Auflage, 1866. (Comp. 287. B.)
- [25] *Derselbe, Geschichte der Nationalökonomie in Deutschland*, München, 1874.
- [26] Samuelson, P. A., *The Collected Scientific Papers*, vol. 6.
小山昭雄訳「市場機構と最大化」, 『サミュエルソン経済学体系 第6巻』, 篠原三代平・佐藤隆三編, 勁草書房。
- [27] Tomo, S., Introduction to (3).
- [28] Tribe, K., *Governing Economy*, Cambridge University Press, 1988.

(経済学部助手)